

## 2018年度終了 重点領域研究(テーマ)一覧

所属	職	氏名	研究テーマ 等 ※課題名をクリックすると該当する研究課題の研究成果報告書のページへジャンプします。
英文学科	教授	三浦幸子	小学校、高等学校への学生ボランティア派遣を通じた授業支援と教員養成【研究期間:2017-2018年度】
COC推進機構	准教授	山口博史	ドローン空撮による地域資料情報化を通じた地域研究・教育活動の試み【研究期間:2018年度】
学校教育学科	准教授	瓦林亜希子	日仏間の教育研究交流(特に自身の研究テーマであるフレネ教育について)【研究期間:2018年度】
英文学科	教授	中地 幸	アジア英語文学と揺れ動くモダニズムー日本、インド、中国からの視点 (English Writings in Asia and Modernism in Motion : From the Perspectives of Japan, India and China)【研究期間:2018年度】
英文学科	教授	福島佐江子	インターネット用語論:文脈中で期待されることと慣習化の観点から【研究期間:2018年度】
国際教育学科	教授	原 和久	北欧の大学との交換留学協定に基づく各種教育プログラムの開発およびネットワーク構築に関する研究【研究期間:2018年度】

# 研究 成 果 報 告 書

2019 年 8 月 21 日

## 1. 所属・職・氏名 等

文学部英文学科 教授 三浦幸子

## 2. 研究課題（テーマ）名

小学校、高等学校への学生ボランティア派遣を通じた授業支援と教員養成

## 3. 研究期間

2017（平成 29）年度から 2018（平成 30）年度まで

## 4. 利用した研究費の種類及び金額

重点領域研究費交付金（地域に貢献する研究領域）

2017（平成 29）年度：125,860 円

2018（平成 30）年度：555,680 円

## 5. 研究の概要

本研究は、地域貢献と高大連携を踏まえた教員研修、教員養成および教室内言語習得に関するもので、以下の 3 点をねらいとした。

- (1) 英語教師を目指す学生の、現場（教室）での学習支援を通しての児童・生徒理解と教員としての資質向上
- (2) 現場教師の授業改善支援
- (3) 言語活動の活性化や教師の言語による介入（発問、コミュニケーション方略や修正フィードバックの使用など）が生徒の言語学習に及ぼす影響についての分析と考察

上記(1)(2)(3)のそれぞれについて、概要は以下のとおりである。

- (1) 英語教師を目指す学生の、現場（教室）での学習支援を通しての、児童・生徒理解と教員としての資質向上

### 1) 下吉田東小学校への学生派遣について

2010（平成 22）年より下吉田東小学校（当時、小学校外国語活動研究指定校）より、外国語活動実施また研究をするにあたっての指導、助言、支援を依頼され、外国語活動を実施するにあたっての準備、指導と評価に関する助言、学生ボランティアの派遣（授業にアシスタントとして参加）を毎年行ってきた。当初は、文部科学省研究指定校であったため、申請者の出張費や学生ボランティア交通費も小学校の研究費に計上できたが、政権交代での仕分け作業により、指定校からはずれ、3 年目からは吉田市教育委員会の予算から学生ボランティアの交通費だけ支給していただいている。小学校側からの学生

参加継続の希望が非常に強く、毎年途切れることなく学生を送ることができている。今回の研究期間に派遣された学生は 2017 年度 4 名、2018 年度 3 名であった。

## 2) 都留興譲館高校との高大連携における授業支援と教員養成について

2015（平成 27）年に都留興譲館高校の小高聖恵教諭（英語科）より依頼があり、高大連携を考えた取り組みとして以下の 3 点について支援を行ってきた。

- ① 高大連携における自律・自立学習を推進する授業改善と学習指導の提案
- ② 授業担当者の授業改善
- ③ 英語教師を目指す学生の資質向上

英語教師を志望するゼミ生を定期的に高校の英語授業に派遣し、おもにティーチング・アシスタントとして授業に参加させ、担当英語教諭との協力や授業時の協力また個々の生徒の支援を行うことにより、個々の学習者の理解とそれに応じた授業支援のあり方を考える機会を与えた。また、授業計画や活動開発の段階で申請者と授業担当者間の打ち合わせに参加することにより、授業や活動計画、実施上の留意点などについても学ぶ機会を与え、自律した英語教師の育成をはかった。

2017 年度は当該教諭の担当が高校 3 年生であったため、学生参加で扱う内容を相談したうえで、大学センター入試対策と学生による学習アドバイスが中心となった。

2018 年度は、高校 2 年生が対象であった。過去に高校生からとったアンケートデータ等も精査しながら、2 月、3 月、4 月、8 月、9 月、10 月にわたり、申請者の研究室で担当教諭と直接、またメールで随時連絡をしながら打ち合わせを行い、インタラクティブな活動とライティングを課題として取り扱うことに決定した。5 月中に、事前に出しておいた高校生へのライティング課題（申請者と学生宛の自己紹介文）を確認してフィードバックを行い、11 月から学生による授業支援を開始した。中心となった課題と活動は「教科書本文内容および沖縄への修学旅行と関連させた対話とライティング」であった。学習方略使用に関する事前事後アンケートだけでなく、授業内での対話を IC レコーダーで録音し、また 3 回にわたるライティングを行った。参加学生は、2017 年度 4 名、2018 年度 3 名であった。

## (2) 現場教師の授業改善支援

新たな試みとして外部講師を招聘しての「英語教育セミナー」を実施した。2017 年度は 2018 年 2 月 4 日（日）に開催した。当初は「3 年間指導計画立案と Can-do 作成のための講演会開催」を予定していたが、小高教諭及び都留興譲館高校の先生方からのご意見を聞き、「新学習指導要領をふまえた英語授業のありかた」というテーマで、工藤洋路先生（玉川大学文学部英語教育学科准教授）と津久井貴之先生（お茶の水女子大学附属高等学校）にお話しいただいた。2018 年度は 2019 年 2 月 2 日（土）に、新学習指導要領を鑑みた授業改善を目的に講演兼ワークショップを開催した。講演者は本多敏幸先生（千代田区立九段中等教育学校）で、「新学習指導要領を見据えた授業

づくり」について解説のうえ、実際にワークショップとして実演も見せていただいた。

- (3) 言語活動の活性化や教師の言語による介入（発問、コミュニケーション方略や修正フィードバックの使用など）が生徒の言語学習に及ぼす影響についての分析と考察

参観（録画）した中高での授業における教師の英語による介入とそれに応じた生徒の発話を会話分析方法により、①生徒の理解が十分でない場合の支援（足場掛け）②生徒の発話が（意味、形式として）十分でない場合の支援（足場掛け）に関して分析、考察を行い、「英語による英語の授業」および「対話的学び」を促進するための示唆を提供する。研究期間内には、都留興譲館での授業における生徒と学生ボランティアのやり取り、ハンガリーの中高でのアーバン・アグネス先生の授業におけるやり取り、群馬県新島学園中学校高等学校での中島利恵子先生の授業におけるやり取りを参観、録画した。

## 6. 研究成果等

- (1) 英語教師を目指す学生の、現場（教室）での学習支援を通しての、児童・生徒理解と教員としての資質向上

### 1) 下吉田東小学校への学生派遣について

下吉田東小学校へ学生ボランティアとして派遣した学生たちは外国語活動の準備と実施のため、FLTの先生との（英語での）打ち合わせにも参加し、英語運用能力、特に英語母語話者の先生とコミュニケーションをとる力を伸ばすだけでなく、外国語活動以外の現場での教師の仕事全般に関わる好機をいただき、結果的に教員採用試験合格率も高い。（過去10年間での経験者22名のうち15名が小中学校正規教員として合格している。他7名のうち、4名は一般企業に就職、3名は在籍中。）申請者は必要に応じて学校（教頭先生が担当窓口）やFLTと連絡を取り、2018年には学生たちが中心で行う授業実践の機会をいただき、「主体的・対話的・深い学びを目指す授業」を計画、実施した。対象クラス（6年生）の児童たちからは「とても面白かった。たまにはこのような授業を行ってほしい。」と肯定的な感想をもらった。他学生6名とともに小学校を訪問して授業支援、参観を行い、大学で振り返りを行った。その授業実践に関しては、学報137号にて報告している。今回の研究期間中に派遣した学生の進路は以下のとおりである。

2017年度派遣学生：

- ・4年女子（千葉県中学校英語教諭：正規合格）
- ・4年女子（長野県中学校英語教諭：正規合格）
- ・4年女子（福井県小学校教諭：正規合格）
- ・4年女子（一般企業就職）

2018年度派遣学生

- ・大学院女子（2019年8月時点で山梨県中学校英語一次合格）

- ・ 3 年女子（カナダ留学中）
- ・ 3 年女子（カナダ留学を経て在籍中）

## 2) 都留興譲館高校との高大連携における授業支援と教員養成について

参加学生は、高校での実際の授業において、英語による口頭導入や、ペアワークのやり取りやライティングの見本を示すことで、また、個々の生徒への支援によって教師としての英語使用に関する振り返りと改善をはかることができた。ライティングのフィードバックや授業での生徒主体の訂正方法などについても申請者と学生間で検討したことを現場教員と高校生に還元することができた。さらに、授業計画において、Can-do の活用についても実践的な提案を行った。学生による授業参加の期間は 11 月～2 月と短いものであったが、生徒のより主体的で協働的な授業参加を学生がどう支援するかということから授業者の授業改善にもつながったと感じている。

今回の研究期間中に参加した学生の進路は以下のとおりである。

2017 年度派遣学生：

- ・ 大学院男子（神奈川県高等学校英語教諭：正規合格）
- ・ 大学院女子（山梨県中学校英語教諭：正規合格）
- ・ 4 年男子（福井県中学校高等学校英語教諭：正規合格）
- ・ 3 年女子（次年度に青森県高等学校英語教諭：正規合格）

2018 年度派遣学生

- ・ 4 年男子（東京都中学校英語教諭：正規合格）
- ・ 4 年女子（青森県高等学校英語教諭：正規合格）
- ・ 3 年女子（2019 年度 8 月時点三重県中学校英語一次合格）

## (2) 現場教師の授業改善支援

2 回の「英語教育セミナー」を実施し、本学学生だけでなく、卒業生や近隣の高校の先生方に予想より多くご参加いただき（両方とも約 60 名）、たいへん盛況であった。近隣の高等学校の先生方（都留高校、上野原高校、都留興譲館高校等）や山梨県教育研修センターの方々にもご参加いただき、アンケートから今後も同様の企画を望む声が多く寄せられた。また、高校の先生方からはセミナー後に進路についての相談などもあり、授業改善支援だけでなく、進路も含めた高大連携という点でも意味のある開催となった。セミナーの内容や様子については、学報 137 号および 140 号で報告している。

## (3) 言語活動の活性化や教師の言語による介入（発問、コミュニケーション方略や修正フィードバックの使用など）が生徒の言語学習に及ぼす影響についての分析と考察

2018 年度に行った都留興譲館高校授業における生徒間および学生ボランティアと生徒のやり取りがライティングに与える影響について、録音データとライティングのデータを分析中である。同年 9 月には、高校 2 年生で CEFR の B2 を、高校 3 年生では C1 を目標とするハンガリーの高等学校授業視察と先生方との情報・意見交換を行った。各

生徒の目標設定を確認する機会を設けており、授業自体は非常にコミュニケーションで、教師と生徒、生徒間のインタラクションが活性化された授業であり、教師が知識を教え込むというよりも、生徒たちを主体的に考えさせながら、また、英語を使用させながら学ばせているという点で、日本の新学習指導要領とも適応するところが多かった。また、アンケートから浮き彫りになった興譲館高校での対象生徒の課題である家庭学習に向かう動機づけがうまく高められており、興譲館高校への提案として示唆するものが多くあり、有意義であった。

## 7. 研究の実績（論文・発表 等）

現在、以下を予定している。

- ・「都留興譲館高校との高大連携プロジェクト（1）  
生徒のやり取りを活性化する言語活動の提供と学習方略使用の変化」  
都留文科大学紀要第91号（予定）
- ・「都留興譲館高校との高大連携プロジェクト（2）  
意味ある場面設定と対話がライティングに与える影響」  
都留文科大学紀要第92号（予定）
- ・生徒の発話を活性化する教師の言語使用：F-move

最後に、重点領域研究費を交付していただいたこと、また、都留興譲館高校の皆様のご協力に感謝申し上げます。

## 平成 年度 学術研究費等交付金 研究成果報告書

平成 31 年 2 月 28 日

研究者	氏名：山口博史	職位：准教授	
	所属(学科等)：COC 推進機構		
研究課題名	ドローン空撮による地域資料情報化を通じた地域研究・教育活動の試み		
研究年度	平成 30 年度 から	平成 30 年度	まで
研究費の種類	重点領域研究費	交付額	98334 円
研究費の種類		交付額	円
研究概要等			
<b>【概要】</b> 本研究はドローンによる空撮の実践を行ないながら、地域研究・教育活動に地域資料情報化の側面から貢献しようというものであった。その際、教員だけではなく学生などとともに活動を進めることを考えた。実際に空撮を行なう際には、その活動が問題とならないよう、諸方面との調整を慎重に行なうようつとめることとした。 この目的を達するため、まずは専門家による講習を依頼・実施した。講習には有志学生、教員が参加し、ドローンを飛行させる際に留意すべきこと、および基本的な操作についてレクチャーを受けた。講習によりドローンを飛行させるための課題が明確になったため、当分の間、屋内を中心に飛行実績を積むこととした。 その他、将来的にドローンによる空撮を行なう場合の候補地の選定、またドローンによる空撮画像と統合を目指す地域情報の収集などにつとめた。また学生の参加も随時受け付け、ともに飛行の実績を積むことができた。参加した学生はこのプロジェクトに好意的で、今後とも参加していきたい旨のコメントがしばしば聞かれた。とはいえ、ドローンによる空撮の潜在力を十分に活かすには今後も学生とともに飛行実績を積んでいくことの必要性が本年度の活動を通じて痛感された。より一層充実した活動を行なうにあたって、来年度に向けての課題としていきたい。 ドローンは地域資料情報化にあたって大きな潜在力を持つデバイスとなりうる。来年度以降の活動を通じて、各学会などでドローンを活用した教育、研究活動の提案の見通しに関する事など新しいアイデアにも到達した。その意味で、初年度としては今回の活動は今後につながるものであったとみている。			

ここをクリックすると、一覧に戻ります！

# 研究 成 果 報 告 書

2019年 09月 07日

## 1. 所属・職・氏名 等

教養学部・学校教育学科・准教授・瓦林亜希子

## 2. 研究課題（テーマ）名

日仏間の教育研究交流（特に自身の研究テーマであるフレネ教育について）

## 3. 研究期間

2018年7月末日~2019年3月末日

## 4. 利用した研究費の種類及び金額

重点領域研究費	400000円受給のうち以下のように利用
旅費等	425700円
謝金（通訳・コーディネート代）	40000円
合計	465700円（うち個人負担金65700円）

## 5. 研究の概要

日仏間の教育研究交流をテーマに頂いた本研究費であり、本来はフランスから研究者を招聘して大学での交流を図りたかったのだが、時間的に叶わなかった。そこで、2018年後期以降、ちょうどフランスの大学2校と本学との交換協定の話が持ち上がったので、その話を進めるべく本研究費を使わせて頂き、オランダのフレネ学校訪問と兼ねてフランスのロレーヌ大学とトゥールーズ大学に、2019年3月に行かせて頂いた。

## 6. 研究成果等

2019年3月 オランダとフランスを以下の3点を目的として訪問した。

- 1) オランダのフレネ学校、イエナプラン学校見学と教師への聞き取り調査
- 2) フランス・ロレーヌ大学アンリ＝ルイ・ゴ准教授と共同研究と短期の交換留学制度（日本・フランスそれぞれの教育研修旅行）の実現についての打ち合わせ
- 3) フランス・トゥールーズ大学クリスチャン・ギャラン教授と都留文科大学とトゥールーズ大学の交換留学制度の締結についての打ち合わせ

まず、1)のオランダのフレネ学校訪問については、フローニンゲンにあるモダン・イエナ学校（フレネ教育とイエナプラン教育を融合させた教育を行っている新しい学校）から、前日に急



な事情から受け入れができないとの連絡が入った。どうなることかと思っただが、現地のコーディネーターの方が代わりの受け入れ先を急遽見つけて下さり、エンスヘーデンにあるフレネ学校を無事に見学をすることができた。急な訪問だというのに、快く日本人の私たちを迎えて下さった先生がたは皆あたたかく、また子どもたちもとても落ち着いた様子でとても好感が持てた。二校目のデルフトのフレネ学校も、校舎が普通の家のような建物で、中も自分の家のようにくつろげるような、心地よい空気が流れていたのも印象的であった。両者ともに移民の子どもたちも多くいたが、学校の中に自然に溶け込んでいたようだった。オランダで長くフレネ教育を実践されてきた先生にもお会いできたので、今後密に連絡を取り合い、改めてゆっくりと見学に行かせて頂けるようお願いをし、快諾をして頂けた。

その後はパリ経由でフランスのナンシーに移動し、2)の通りロレーヌ大学の共同研究者である、ゴ先生とお会いし、今後の研究について話し合いができた。また、国際交流セクションの副代表であるドナート・ロリュビオ先生とお会いした。そこで議論した都留文科大学との交換協定の話については、こちらの想像以上に興味を持って下さり、まずは短期の研修旅行を日仏で企画し、学生を送りあうことができないか、という話にまで進んだ。

再びパリにもどり、国会図書館に資料調査に行ったところ、職員のストが行われており、外部からの受付は一切できないといわれてしまった。仕方なくパリ市内の本屋を回り、教育学系の本を8冊ほど購入した。国会図書館に入れなかったのは残念であったが、久々にパリにあるいくつかの本屋を周り、研究関連の本を見ることができたのは良かった。

次に、パリから南のトゥールーズに移動した。市内にあるトゥールーズ大学に伺い、3)の都留文科大学との長期交換留学協定についての打ち合わせに臨んだ。私の博士論文の指導教授であったクリスチャン・ギャラン先生は、当日パリで教育省での仕事が入ってしまったとのことで不在であったが、代わりに文学部日本語学科の副学科長であるオオタ・トモミ先生とお会いし、まずは軽く打ち合わせをしてから、国際交流セクションの副代表であり大学副学長のクリスティナ・スタンジュ＝ファイヨ先生にお会いした。そこでは、今後協定を実際に結ぶにあたっての、具体的な日程なども検討し、2019年の9月末までにお互いに書類を先ずはそろえ、事務レベルで円滑に公的な協定を進められるよう準備を確認することができた。

以上のように、今回のオランダ調査とフランスでの交換協定交渉は、お蔭様で第一歩として順調なスタートを踏み出すことができた。来年度はこれらのことを土台に、さらに日蘭、日仏間の交流を深めていきたい。自分自身の両国間での教育学研究を進めていくことはもちろんのこと、特にフランスの二校の大学から、今度こそフランス人研究者を日本に招聘し講演会を開くなどして、フランスにおいてだけでなく、日本においてつながりを深めることを進めていければと考えている。そうすることで、多くの都留の学生たちが、フランスの文化や教育に興味を持ち、フランスに留学したり研修旅行に出かけたりし、見聞を広めていくことの一助ができるように制度をさらに整えていきたい。

## 7. 研究の実績（論文・発表 等）

- フレネ教育研究会の 2019 年度夏の全国集会（於：東京・御茶ノ水付属小学校）にて発表（2019 年 8 月 3 日に「オランダ・フランスのフレネ学校の現状」という題目で発表）
- 日本生活教育連盟の 2019 年度夏の全国集会（於：愛知・名古屋大学）の分科会「能力・発達と評価」にて発表（2019 年 8 月 11 日に「オランダにおけるフレネ学校—学びの空間としての視点から」という題目で発表）

## 1. 所属・職・氏名 等

代表研究者 英文学科教授 中地幸

共同研究者 英文学科特任教授 大平栄子

米国セント・ノバート・カレッジ 鳥本幾子

杭州師範大学講師 陳敏

## 2. 研究課題（テーマ）名

「アジア英語文学と揺れ動くモダニズム---日本、インド、中国からの視点」(English Writings in Asia and Modernism in Motion: From the Perspectives of Japan, India and China)

## 3. 研究期間

2018 年度（2018 年 5 月～2019 年 3 月）

## 4. 利用した研究費の種類及び金額

重点研究（国際共同研究）

## 5. 研究の概要

21 世紀になって、モダニズムをどのように考えるかは多くの批評家の論点となっている。ローラ・ドイルとローラ・ウインケルは、『ジオモダニズムズー人種、モダニズム、モダニティ』（2005）において、グローバル・モダニティの文化的・政治的ディスコースと関係した「ジオモダニズム」という用語が導入しながら、世界におけるモダニズムの相互関連性について論じた。一方、2009 年の *PMLA* にダグラス・マオとレベッカ・ウォルコウィッツは「新モダニズム研究」という論文を発表したが、彼らは「新モダニズム研究」の地平を、歴史的、地理的な範囲の拡大とハイアートとローアートの区別の崩壊の上に位置づけた。またスーザン・フリードマンは「惑星的モダニズム」という用語のもと、さらにラディカルにモダニズムの時空の拡大を説く。フリードマンは、「モダニズム／モダニティの惑星的認識論はヨーロッパ中心主義の型を破ることである」と述べ、モダニズムの定義が 20 世紀初頭のヨーロッパの軸にとどまることを完全に拒絶する。さらに 2014 年の *PMLA* にデビッド・ジェイムズとウルミラ・セシャギリによる「メタモダニズムー継続と革命のナラティブ」という論文はモダニズムの遺産を受け継いだ現代文学を「メタモダニズム」という語で定義しようとするもので、現代文学とモダニズム文学をつなぐ重要な視点を提供した。

本プロジェクトは、上記のような 21 世紀のモダニズムへの批評家たちの挑戦を出発点としながら、アジア英語文学の視点からどのようにモダニズムの再定義をはかれるかという大きな問題に挑戦するものである。代表者はすでにジャポニスム研究の視点からこの問題に取り組んできたが、個人研究として扱うにはあまりに大きな課題であるために、共同研究として立ち上げることで、さらにこの問題を複層的に考察し、深めることが出来ると考え、このプ

プロジェクトを立ち上げた。焦点としては、岡倉天心、野口米次郎、翁久允といった日本人でありながら英語で発信し、英語文学に寄与した作家たちとエズラ・パウンドやローレンス・ビニヨン、ウィリアム・バトラー・イェーツなど東洋文学や東洋美術にインスピレーションを得た西欧モダニスト文学者たちの交点を、英米、インド、中国との関係から探るもので、タゴールや魯迅との関係も考慮しながら、いかにアジア英語文学が西欧のモダニズム文学に影響を与えていたかを検討しようとした。

## 6. 研究成果等

大平栄子氏はインド文学を長年研究してきたが、その過程でタゴール文学の重要性を再認識し、そこから研究を岡倉天心などの日本人英語文学研究へと発展させ、「日本英語文学」という概念の創出に尽力している。本プロジェクトの中では仏教に焦点を当て、岡倉天心の作品における仏教概念を近代仏教研究をいう大きな視点から詳細に検討した。仏教に関しては、ラオスにおいて、ラオス国立大学、国立中央図書館、仏教博物館などにおいて英語著作の文献調査を行った他、僧院での聞き取り調査をした。またヨーロッパにおける日本研究の最大の拠点校であるハイデルベルク大学日本学研究所において、日本近代仏教研究に関する資料調査を行なうと共に、Clara Boehnne 氏（プロジェクトリーダーはハンス・マーティン・クレーマー教授）からの知識供与を得た。またミャンマーのヤンゴン大学中央図書館にて、20世紀初頭の近代仏教改革についての資料調査を行い、関連資料を収集した。2018年の成果はハワイ国際学会で発表した。鳥本幾子氏は移民作家である翁久允についての大著を出版された翁久允研究の第一人者であるが、さらなる翁久允調査をUCLAおよびUniversity of Hawaiiにおいて行い、今回は久允翁に遅れてサンフランシスコに到着し、夫が現地の日系の新聞に書いた記事についての妻の関与についての調査を丹念に行いながら、翁久允の20世紀アメリカ移民文学における位置を明らかにした。成果はハワイ国際人文学会にて発表した。陳敏氏はエズラ・パウンドやローレンス・ビニヨンなどイギリスで活躍した詩人、芸術家、美術史家との関連の研究においてモダニズムにおけるアジア要素、とりわけ中国的な要素の取り込みについての研究を行ったが、ミッシェル・フーコーの「ヘテロトピー」（異空間）概念を使いながら、19世紀において西洋によって作り上げられたシノワズリー美術空間が、日本政府が関与もしたジャポニスム空間とは異なった次元にあったこと、またエズラ・パウンドのメトロの詩の背景には驚異的な人数を集めた日英博覧会のポスターの存在があったこと調査をした。またハワイの博物館で移民の歴史やモダニズム美術や20世紀初頭のエスノグラフィの調査をすると同時に、日本でイサムノグチと長谷川三郎、柳宗悦の「民藝」他、日本美術やモダニズム作品展示、エズラ・パウンドを魅了したカリグラフィについての調査を行った。研究成果はハワイ国際人文学会で発表すると同時に、都留文科大学で講演発表した。中地幸は国内でヨネ・ノグチ学会に参加しながら、野口について研究を進めた。12月に19世紀のイギリスの大英博物館及びヴィクトリア&アルバート美術館においてアジア美術のコレクションを整理したローレンス・ビニヨンやエドワード・ストレンジやアーネスト・フェノロサなどの著作に取り上げられる中国美術についての調査を中国で行った。またビニヨンのヨネ・ノグチへの影響をその詩や美術論に焦点を当てながら考察すると同時にヨネ・ノグチがエズラ・

パウンドのモダニスト詩やウィリアム・バトラー・イェーツの能にインスピレーションを得た戯曲世界に与えた影響、また野口の魯迅やタゴールとの友人関係がいかに関与したかを論じた。成果はハワイ国際人文学会で発表し、またヨネ・ノグチ学会でも発表をした。

4人はハワイの国際人文学会に集まり、それぞれの成果を発表すると同時に、学会中にそれをふまえての研究会合を持った。この研究会合を通して、翁久允、岡倉天心とヨネ・ノグチの仏教的レトリックの使い方の類似性と相違、ローレンス・ビニヨンの中国美術観と日本美術観、日英博覧会における日本政府が大きく係わったジャポニスム表象とロンドン国際展における中国芸術という異空間性、ビニヨンとパウンドとイェーツとノグチの緊密なインターテクスチュアリティ、久允翁の妻やヨネ・ノグチの校正者であったレオニーギルモアによる執筆への関与の問題などがわかり、西洋モダニズムの大きな潮流の中で、アジア系の英語作家たちがオリエンタリスト的トレンドに逆らうと同時に、仏教レトリックを利用しながら西欧モダニズム文学に関与していったことが話し合われた。そしてその影響がさらに日本文学・中国文学・インド文学に逆照射していったことを考えた時に、「アジア英語文学」という枠組を超えて、エクソフォニーな「世界文学」という枠組みの導入することの意義についてまで議論をすすめることができた。

## 7. 研究の実績（論文・発表 等）

- Chen, Min. “Chaing Yee, Laurence Binyon, and Ezra Pound: Re-tracking the Chinese Influence in Modern Poetry.” The 17<sup>th</sup> Annual Conference of Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Jan. 11, 2019.
- . “Ezra Pound’ s Asian Eyes: From Museum Exhibitions to Modernist Poetry.” Lecture, Department of English, Tsuru University, Jan. 17<sup>th</sup>, 2019.
- Ohira, Eiko. “The White Fox as a Work of World Literature.” The 17<sup>th</sup> Annual Conference of Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Jan. 10, 2019.
- Nakachi, Sachi. “Laurence Binyon’ s Influence on Yone Noguchi” The 17<sup>th</sup> Annual Conference of Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Jan. 11, 2019.
- . 「俳句（小曲）」『現代詩手帖』7月号、37頁
- . 「ヨネ・ノグチとエズラ・パウンドとイマジズム」（翻訳 伯谷嘉信著）『現代詩手帖』7月号 44-65頁
- . 「野口米次郎の日本美術論とその背景」ヨネ・ノグチ学会 2019年7月6日
- Torimoto, Ikuko. “Kyūin Okina and his wife Kiyoko’ s life as immigrants to the American West Coast.” The 17<sup>th</sup> Annual Conference of Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Jan. 12, 2019.

[ここをクリックすると、一覧に戻ります！](#)

## 平成 30 年度 学術研究費等交付金 研究成果報告書

平成 31 年 4 月 24 日

研究者	氏名：福島佐江子		職位：教授
	所属(学科等)：英文学科		
研究課題名	インターネット語用論： 文脈中で期待されることと慣習化の観点から		
研究年度	2018	年度 から	2018 年度まで
研究費の種類	重点領域研究	交付額	¥406,180 円
研究費の種類		交付額	円
研究概要等			
<p><b>【研究概要】</b></p> <p>本重点領域研究はハンガリー科学アカデミー言語学研究所並びに大連外国語大学教授のカダール博士(Daniel Z. Kadar)との国際共同研究である。</p> <p>本研究は、「文脈の中で期待されること」(moral order)と「慣習化」(conventionalization)を主な軸にし、昨今目覚ましい発展と普及を遂げたインターネットにおける相互作用(interaction)を語用論の観点から研究したものである。</p> <p>インターネット上の相互作用を研究する分野としてはこれまで「コンピューターを介したコミュニケーション」(Computer-mediated communication)が取り上げられてきているが、本研究ではさらに踏み込んで、インターネットを介した相互作用の研究を推し進めた。インターネット上で行われる相互作用は、独特のスタイルを持っていることが多い。本研究では、インターネット上の相互作用では何故独特なスタイルが使われるのか、どのような時に使われるのか、また語用論の観点からは何を意味するのか等について考察した。研究対象として、インターネット上の相互作用が本になった『電車男』をデータとして使用した。この本は全 364 ページから成り、1,680 のインターネット上の相互作用のみで構成されている。データとして日本語の相互作用を取り上げたのは、以下の理由による。日本語の相互作用では日本語の書き言葉の特性から、英語のようなアルファベットのみの文字しか使用しない言語に比べると、はるかに多くの独特なスタイルの相互作用を生み出すことが可能である。例えば、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字の組み合わせや、故意に間違った漢字変換等を使用することにより、インターネット上の独特なスタイルは多岐にわたる。語用論の先行研究の中に『電車男』を研究対象にしたものはあるが、本研究では上述の「文脈の中で期待されること」や「慣習化」を分析や考察に使用した。これは先行研究には見られなかった視点である。</p> <p>研究の手順としてはまず、独特な相互作用のスタイルの使用頻度によってカテゴリーを作成し、1,680 の相互作用全てをそのカテゴリーに分類し、量</p>			

的に分析した。その後、ストーリーの展開によってどのようなカテゴリーが増減しているか、またそれは何故起こるか等の質的分析を加えた。主人公とその他の人々の相互作用は対人語用論の観点からも分析することが可能である。インターネット上の相互作用において独特のスタイルを使用することは、グループ内での慣習化であり、他のグループメンバーとの連帯感を強めたり、潜在的な無礼を避けたり和らげたりする機能があると考えられる。また、相互作用の中にはインターネット上の独特のスタイルと標準スタイルが混在する場合もあり、標準スタイルから独特のスタイルへシフトすることは、仲間内で期待されていることであり、仲間との連帯感を強めたいという気持ちの表れと捉えることもできる。データ分析の結果を踏まえ、主に「文脈の中で期待されること」と「慣習化」の視点から語用論的解釈を試みた。

インターネットの普及に伴い、語用論研究では「インターネット語用論」という分野も確立してきており、2018年にオランダの John Benjamins Publishing Company から *Internet Pragmatics* という国際学術雑誌が創刊された。本研究の成果は、国際学会(11<sup>th</sup> International Conference on Im/politeness) で発表したばかりでなく、論文としてもまとめ、上記の *Internet Pragmatics* 第一巻2号に掲載された。

#### 【学会発表、書籍収録等】

##### 学会発表

Fukushima, Saeko and Daniel Z. Kadar. (2018). Local moral order(s): A case study of conventionalised e-politeness in Japanese. 11th International Conference on Im/politeness. (査読付き)

##### 学術論文

Kadar, Daniel Z. and Saeko Fukushima. (2018). The meta-conventionalisation and moral order of e-practices. *Internet Pragmatics* 1 (2): 352-378. (査読付き)

上記のような研究活動ができたことは、重点領域研究としてサポートしていただいたからであり、都留文科大学に深く感謝申し上げます。

[ここをクリックすると、一覧に戻ります！](#)

# 研究成果報告書

2019年8月21日

## 1. 所属・職・氏名 等

国際教育学科 教授 原和久

## 2. 研究課題（テーマ）名

北欧の大学との交換留学協定に基づく各種教育プログラムの開発  
およびネットワーク構築に関する研究

## 3. 研究期間

平成 30 年度から平成 30 年度まで（1 年間）

## 4. 利用した研究費の種類及び金額

重点領域研究費 3,416,700 円

## 5. 研究の概要

2017年4月に創設された国際教育学科では、高度の語学力と世界で通用する教育力を育むために2年次後期より約半年間の北欧交換留学をカリキュラムに位置づけている。交換留学の初年度となる2018年度には、本学科より52名の学生が北欧の大学へ留学すると同時に、28名の北欧の学生が本学科に来日し今年度入学した1年生とともに日本の教育制度や文化について理解を深めた。

本研究プロジェクトは、都留文科大学初の試みであるこの「北欧交換留学プログラム」を成立させるためのプログラム開発や北欧大学教員との協力関係の構築を行いながら、その意義と効果について考察することを目的としたものである。また、次年度以降よりよいプログラムにしておくための基礎的データの収集およびR&D(リサーチ&デベロップメント)も行った。

本研究プロジェクトは、国際教育学科専任教員全員、インターナショナルコーディネーター、事務職員を研究員とし、デンマークなど北欧の大学教員の協力も得ながら2年間の国際共同研究として実施されたものである。

## 6. 研究成果等

グローバル化の進展によりあらゆる場面で国際的な連携が進む中、様々な文化的背景を持つ人々と協力し主体的に活躍できる人材の育成が急務となっている。国際教育学科では、単に英語「を」学ぶのではなく英語「で」学びを拓き、国際的な視野で行動できるグローバルエドューケーターを養成することを目標に、重点領域研究として「北欧交換留学プログラム」の開発に取り組んだ。研究では、学科の教員が順番に北欧の大学を訪れ、交換留学協定の締結、現地教員との研究交流、都留スタディーアプロードプログラムの広報活動、などを行った。また、現地の大学教



員や学生が都留に来学した際には、特別講演会、国際シンポジウム、学生に対するセミナー(Brown Bag Seminar)、プレゼンテーションなどを実施するなど、北欧大学との交流に努めた。また、同時に北欧の教員を都留市内の小中学校に案内し、日本の教育や教育制度に対して理解を深めてもらう活動も行った。

このような北欧の大学との地道な関係構築の結果、2018年の夏までに、デンマーク6大学(10キャンパス)、スウェーデン1大学、フィンランド1大学の計8大学と交換留学協定を結ぶことができた。いずれも教員養成系、もしくは教育学部を持つ大学で、本学の学生たちは2018年8月から4~5か月にわたって、いずれかのキャンパスで現地の学生や留学生と共に英語で現地の授業を履修しながら、それぞれの探究学習に取り組むことができた。また、留学中、現地の小中学校での教育実習やインターンシップを経験することでできた学生も多くあった。学生たちが提出した現地報告からは、言語の壁や文化の違いに苦労しながらも大学での学修や北欧での生活を満喫した様子が伺われ、学科として大きな成果を感じている。

また、2018年8月末には、逆に交換留学協定を結んでいる北欧の大学から28人の外国人留学生が順次都留市に到着し、本学での「都留スタディアブロードプログラム(T-SAP)」も本格的に始まった。留学生たちは、学科で開設している専門科目を、授業によっては日本人学生と共に英語で履修しながら本学での学びを進めた。留学生たちが来学したことで、名実ともに5号館は多言語・多文化環境となり更に華やかになった。また、滞在中、学生たちは日本の小中学校を見学し日本の教育制度について理解を深めたり、日本舞踊を体験したりしながら、地元の方々との交流も行った。北欧の学生たちは、みな大変優秀で授業でも活発に議論が展開されるため、留学準備中の日本人の学生のみならず教員である私たちにとっても大変よい刺激となった。留学生には、プログラム開始直後と帰国直前に質問紙調査を実施した。現在結果を分析中であるが、プログラムの運営や授業の質、また教員や学生のホスピタリティーに対して大変好意的な意見が多く聞かれた。

また、前述のように、交換留学協定に基づいてお互いの大学を研究訪問したり、本学にて国際講演会を開催するなど、北欧大学の先生方と本学教員との研究・人事交流も進展しており、今後の大学間の学術的連携の更なる発展が大いに期待される。来年度(2019年度)は、留学準備中の1年生、留学中の2年生、北欧から帰国した3年生、本学へ留学してきた北欧の学生たち、そして日本留学を終え北欧に戻った学生たちの間のインタラクティブな学び合いや交流もさらに活発で有機的なものとなるだろう。日本でここ都留文科大学にしかないユニークな「学びのグローバルコミュニティ」の創造に向けて、また大学間交流の更なる発展に向けて、国際教育学科の教職員一同さらに良いプログラムにしていきたいと考えている。

## 7. 研究の実績(論文・発表等)

平成30年度の研究成果については、『国際教育学科 年報 第2巻(Global Educator Vol.2)』にまとめ発行した。また、交換留学プログラムの概要については、下記を参照されたい。

原和久(2018)「国際教育学科 北欧交換留学プログラム始動! 『学びのグローバルコミュニティ』の創造に向けて」、都留文科大学報 第138号(都留文科大学)